

## 日本常民文化研究所展示室 収蔵資料「仕事着のひな形」

期間：2017年9月29日～2018年3月27日

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 神奈川大学日本常民文化研究所展示室

### 普段着の技術

加藤 友子

技術を学ぶ方法に、実物を縮小した模型を作る方法がある。縮小したものを作ることができるということは、本物を作る技術があるということを示している。

労働の際に着用した伝統的な衣服を「仕事着」というが、研究所では1980年代に全国規模で昭和の農村・漁村で着用されていた仕事着の形態の比較研究をおこない、『仕事着—東日本編』（1986年）、『仕事着—西日本編』（1987年）として2冊の報告書を刊行している。

この研究報告書から実測図・裁断図・写真をもとにして、2003年に白石ナツ子さんによって五分の一の寸法に縮小し仕立てた着物（ひな形）として、4カ月で約120点を復元していただいた着物が、今回の「仕事着のひな形」展である。

長野県佐久市出身の白石さんは（昭和11年生まれ）、17歳で上京し、千葉県本八幡の文化服装学院にて洋裁を学ぶ。その後、紳士服の縫製工場、洋裁店などで働き、結婚退職する昭和37年までには、背広やオーバーを仕立てる技術を身につけた。子育て中はその技術をいかし、娘たちの洋服をすべて手作りしていた。裁縫技術はこの時代の女性にとって、日常のごく当たり前の技術として備わっていたもので、特別なものではなく生活を営むために必要不可欠な技術であった。この小さな着物には、凝縮した裁縫技術が盛り込まれ、見るものを引きつける力がある。こうした見落とされてしまう、くらしの中の普段着の技術が、いかに優れたもので豊富な情報を提供しうるかを仕事着のひな形資料を通して紹介した。

また、製作にあたって白石さんは、報告書に掲載された実測図や裁断図では、寸やcmの記録が統一されておらず、読み取りは難解で、図版を元に製作すると、とても着物にならないと述べられた。当初、民具実測図の作成の目的のひとつに消失した民具を復元できることが挙げられていたが、今回の復元では布であっても難しいことが確認され、モノの記録化についての問題提起ともなった。



写真1 展示室のガラスケース内にひな形を展示



写真2 ひな形と報告書掲載の写真や実測図